

二月に入り、いよいよ立^{りっしゅん}春を迎えようとしています。立春といいますが、一般には節分の翌日になります。暦^{こよみ}の上では冬至と春^{とうじ}分^{しゅんぶん}の間^{ちゅうかん}、二十四節気^{せつき}の一番目で旧暦ではおおよそ元^{がんじつ}日の頃に当たります。

約三十年に一度は朔旦立春(さくたんりっしゅん)、正月立春ともいう、ぴったり旧暦の元日に重なる日もあるそうで、大変縁起の良い日とされています。そして、“八十八夜^{はちじゅうはちや}”や“二百十日^{にひゃくとおか}”といった雑^{ざっせつ}節は、立春から数え始めます。一年の始まりの日ともいえるでしょう。

曹洞宗のお寺では、立春の日に「立^{りっしゅん}春^{だいきち}大吉」と書かれた紙札^{もんちゅう}を門^{もんちゅう}柱^{ちゅう}や玄関の柱に貼る習慣があります。これは「立春大吉」の全ての文字が左右対称なので、やってきた鬼が出入りを勘違いして帰ってしまうという伝説から、鬼を遠ざける、魔除けの御札ともいわれています。

この由来は、永平寺を開かれた道^{どうげん}元^{りっしゅん}禪師が書かれたといわれている、『立^{りっしゅん}春^{だいきち}大吉文』という、お正月を祝う法語^{ほうご}から来ているとされています。

“仏^{ぶつ}法^{ぽう}僧^{そう}の三^{さん}宝^{ぼう}に帰依することは大吉、立春は大吉、仏法が広まることは極めて大吉”といった祝いの言葉が続き、大吉という言葉が全部で十五個も入っており、縁起ものとして写しを額や掛け軸にして飾るお寺もあります。

また、「立春大吉」の御札は、向かって右の柱に貼る習わしですが、左の柱には、にじゅうせつき^{にじゅうせつき}二十四節気の五番目である、旧暦三月、新暦四月上旬^{せいめい}の清^{せい}明^{めい}の日に「鎮^{ちん}防^{ぼう}火^ひ燭^{しょく}(ちんぼうかしょく)」という火^ひ伏^ふせの御札を貼ります。こちらは、火の字を水の字に似せて崩して書くのが特徴で、南風が吹いて火をあおる季節に当たることから、火防の用心を説くために、總持寺を開かれた瑩^{えい}山^{ざん}禪師が広めたといわれています。今では、お正月に両方のお札を一緒に門^{かか}に掲げるお寺が多いようです。

春を迎えるにあたり、仏様の^み教えが自分自身に生かされて多くの人々に広まることと、日々^{きちじょう}の吉^{きち}祥^{じょう}つまり大吉を祈り、季節の変化をしっかりと見据えて心構えを新たにして、心安らかな日々を送りたいものです。